

5月30日(月) 使徒言行録 27 : 39~44 “全員無事に”

27:39 朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。

27:40 そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。

27:41 ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れた。

27:42 兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、

27:43 百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどませた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、

27:44 残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。

百人隊長がこのような判断をするほどにパウロは信頼を得ていたことが伝わります。少し前の 27 章 22 節では暴風により幾日もあいだ漂流し、助かる望みが消えそうな時に「元気を出しなさい」と励ますパウロの姿があります。その姿は荒れるガリラヤ湖の中、慌てふためく弟子たちとは対照的に横たわっていたイエス様を思い起こさせます。

5月31日(火) 使徒言行録 28 : 11~16 “ローマ到着”

28:11 三か月後、わたしたちは、この島で冬を越していたアレクサンドリアの船に乗って出航した。ディオスコロイを船印とする船であった。

28:12 わたしたちは、シラクサに寄港して三日間そこに滞在し、

28:13 ここから海岸沿いに進み、レギオンに着いた。一日たつと、南風が吹いて来たので、二日でプテオリに入港した。

28:14 わたしたちはそこで兄弟たちを見つけ、請われるままに七日間滞在した。こうして、わたしたちはローマに着いた。

28:15 ローマからは、兄弟たちがわたしたちのことを聞き伝えて、アピフォルムとトレス・タベルネまで迎えに来てくれた。パウロは彼らを見て、神に感謝し、勇気づけられた。

28:16 わたしたちがローマに入ったとき、パウロは番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことを許された。

その時々には助け手を与えられるパウロ、神さまの完璧なご計画に守られながら用いられていたことが読み取れます。ローマでも番兵が一人付くだけという容疑者の扱いを受けていなかったことが書かれており、それほど信頼を得ていたことが分かります。ここでも多くの方にイエス様のことを語り続け、各地の教会へ励ましの手紙を書きました。

6月1日（水）ルカ 18:31～34 “主イエスの姿に重ねて”

18:31 イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。

18:32 人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。

18:33 彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

18:34 十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。

イエス様の御言葉を理解することにも神様がご計画された時があることが分かります。私たちは「理解をすることは早いに越したことがない」と思えてしまっていますが、最適のタイミングを神様は知っており、それを実施されています。私たちも聖書を読む時、メッセージを聞いている時、祈っている時に突然目が開かれ、理解することがあります。一人ひとり、それぞれのタイミングで知識が与えられ、理解が深まり、用いられる者として成長していくのです。

6月2日（木）イザヤ 6：8～10 “預言者イザヤを通して”

6:8 そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだらうか。」わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」

6:9 主は言われた。「行け、この民に言うがよい よく聞け、しかし理解するな よく見よ、しかし悟るな、と。

6:10 この民の心をかたくなにし 耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく その心で理解することなく 悔い改めていやされることのないために。」

一読しても理解しづらいですが、イザヤが預言者として召命を受けた時の神様の言葉です。逆説な意味でそれほどまでに当時の民が「かたくなな民」であったことが想像されます。それでも6章の終わりには「しかし、それでも切り株は残る。その切り株とは聖なる種子である。」と希望の言葉を残されています。

6月3日（金）コリントー 9：1～12 “キリストの福音を妨げず”

9:1 わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主のためにわたしが働いて得た成果ではないか。

9:2 他の人たちにとってわたしは使徒でないにしても、少なくともあなたがたにとっては使徒なのです。あなたがたは主に結ばれており、わたしが使徒であることの生きた証拠だからです。

9:3 わたしを批判する人たちには、こう弁明します。

9:4 わたしたちには、食べたり、飲んだりする権利が全くないのですか。

9:5 わたしたちには、他の使徒たちや主の兄弟たちやケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。

9:6 あるいは、わたしとバルナバだけには、生活の資を得るための仕事をしなくてもよいという権利がないのですか。

9:7 そもそも、いったいだれが自費で戦争に行きますか。ぶどう畑を作って、その実を食べない者がいますか。羊の群れを飼って、その乳を飲まない者がいますか。

9:8 わたしがこう言うのは、人間の思いからでしょうか。律法も言っているではないですか。

9:9 モーセの律法に、「脱穀している牛に口籠をはめてはならない」と書いてあります。神が心にかけておられるのは、牛のことですか。

9:10 それとも、わたしたちのために言っておられるのでしょうか。もちろん、わたしたちのためにそう書かれているのです。耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分け前にあずかることを期待して働くのは当然です。

9:11 わたしたちがあなたがたに霊的なものを蒔いたのなら、あなたがたから肉のものを刈り取ることは、行き過ぎでしょうか。

9:12 他の人たちが、あなたがたに対するこの権利を持っているとすれば、わたしたちはなおさらそうではありませんか。しかし、わたしたちはこの権利を用いませんでした。かえってキリストの福音を少しでも妨げてはならないと、すべてを耐え忍んでいます。

コリントの信者たちを思い、言葉を選んで手紙を書いているのが伝わってきます。使徒であるかどうか、権利のあるなし（それぞれの働きへの報酬等のことでしょうか）に心を騒がせている方々へのメッセージです。キリスト教は信仰の持ち方や受け止め方、考え方の違いで決別していた歴史がありますが、今は様々な信仰の持ち方を認め合う考えが主流となっています。私たちがイエス様を信じる仲間として、お互いの違いを認め合いながら歩んでいきたいですね。

6月4日（土）コリントー 12：1～3 “聖霊によらなければ”

12:1 兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。

12:2 あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。

12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

『聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えない』、この言葉を何度も見聞きしていますが、私は本当に理解するための経験をまだ出来ていないように感じます。自分自身の思いだけでは決して言うことができず、聖霊の働きがあって初めて「イエスは主」と言うことが出来る。祈り求めていきたいです。

6月5日（日）使徒言行録 28：17～31 “聖霊は語り続ける”

28:17 三日の後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いた。彼らが集まって来たとき、こう言った。「兄弟たち、わたしは、民に対しても先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に引き渡されてしまいました。

28:18 ローマ人はわたしを取り調べたのですが、死刑に相当する理由が何も無かったので、釈放しようと思ったのです。

28:19 しかし、ユダヤ人たちが反対したので、わたしは皇帝に上訴せざるをえませんでした。これは、決して同胞を告発するためではありません。

28:20 だからこそ、お会いして話し合いたいと、あなたがたにお願いしたのです。イスラエルが希望していることのために、わたしはこのように鎖でつながれているのです。」

28:21 すると、ユダヤ人たちが言った。「私どもは、あなたのことについてユダヤから何の書面も受け取ってはおりませんし、また、ここに来た兄弟のだれ一人として、あなたについて何か悪いことを報告したことも、話したこともありませんでした。

28:22 あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい。この分派については、至るところで反対があることを耳にしているのです。」

28:23 そこで、ユダヤ人たちは日を決めて、大勢でパウロの宿舎にやって来た。パウロは、朝から晩まで説明を続けた。神の国について力強く証しし、モーセの律法や預言者の書を引用して、イエスについて説得しようとしたのである。

28:24 ある者はパウロの言うことを受け入れたが、他の者は信じようとはしなかった。

28:25 彼らが互いに意見が一致しないまま、立ち去ろうとしたとき、パウロはひと言次のように言った。「聖霊は、預言者イザヤを通して、実に正しくあなたがたの先祖に、

28:26 語られました。『この民のところへ行って言え。あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。

28:27 この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。』

28:28 だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」

28:29 （＋底本に節が欠落 異本訳）パウロがこのようなことを語ったところ、ユダヤ人たちは大いに論じ合いながら帰って行った。

28:30 パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、

28:31 全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。

パウロの時代にはキリスト教がユダヤ人（ユダヤ教）の分派という位置づけだったことが分かります。ただ、至る所で反対の声が上がっていました。キリスト教も長い歴史の中で神さまの御心ではなく自分たちが満足する方向へ進んでいってしまった歴史があります。そして宗教改革が起こり、プロテスタント教会が生まれました。この時も激しい弾圧がありました。反対があると、人はある程度その反対の声に沿うようにこちらの主張を変えがちですが、パウロはイエス様のことに関して決して主張を変えませんでした。それが真実だと知っていたからです。だからこそ歪むことなく世界に伝えられていき、今があるのです。これからも私たちが恐れずに真実を伝える働きをしていくことができますように。